

次の文章を読んで、一〜三の設問に答えなさい。

二十世紀は少なくともここ数千年来、人間の移動がもつとも広範かつ大規模に起こった時代だといえる。一九世紀に人間の移動手段はそれまでの動物から機械に代わり、馬やラクダは鉄道と機関車に、あるいは自動車にとって代わられた。船の動力も、かつての奴隷の労働や自然の風の利用から、内燃機関やモーターに代わった。機械は当初、速度という点ではさほどの変化をもたらさしななかったが、耐久性や持続力や規模の点では動物より格段にすぐれていたし、なにより自然条件の制約を受けずに稼働するという利点がある。それに機械は急速に改良され、鉄道や自動車の速度や輸送力はまたたくまに飛躍的に伸びた。そしてやがて航空機が登場するが、これは障害の多い地上の制約をとうとう離脱して、天候以外にほとんど制約のない空中を、自在に、それも格段のスピードで移動する可能性を人間にもたらした。今世紀はじめ八十日かかった世界一周を、いまではたった一日強で果たすことができるのも、陸と海に続いて空が人間の移動空間になったためである。

だがもちろん今世紀が「移動の時代」であるのは、たんに交通手段が発達したからではない。なにより、人間の大規模な移動を促す条件がさまざまな局面で強力に作用するようになった。そのもっとも基本的な条件となっているのは、世界的規模で推進された産業化だ。産業化はただでさえ大量の人の移動を引き起こす。一八世紀のイギリスを思い起こすまでもなく、産業の形成は大量の労働者が必要とし、そのために農村が囲い込まれて人口を排出することになる。そして工場のある都市は人口を集めて繁栄し、それが没落する農村からさらに人口を吸い寄せる。

このような「農村脱出」<sup>エグゼンダス</sup>によって近代都市の住民たる「大衆」が出現することになる。その特徴は、大地や旧来の共同体との結びつきを失って都会に群衆として浮遊する、帰属なきばらばらの個人の集合だということだ。だがそこには、その個人に担われた新しい意識も積極的な力学として働いている。<sup>a</sup>近代の「自由」の理念の具体的な発現は、旧来の共同体的生活からの「離脱」を、過去や出自といった「自然的」拘束からの「解放」として、積極的に生きた人びとの意識と不可分だった。そこでは故郷を「出ること」、起源の拘束を断ち切ることは、個人の自立の表明であり、個人にとっては「自由」の獲得でもあった。都市とは、産業による新たな富の生産の場であるとともに、そのような「自由」と不可分の空間でもあった。だから多くの人びとが「自由」を求めて都市に出る。都市はそのように「入ってゆく」ところではなく「出てゆく」ところとして位置づけられた、拘束されない何かへの「出口」だったのだ。

だが変化や流動化、それによる既存の秩序の崩壊は、それに対するあらゆる傾向の反動を呼び起こす。個的な自由の発現は、個を包摂する集団的価値や統合原理の「喪失」とみなされ、近代社会の生存形態は「解体」や「腐敗」と言った用語で語られた。そして「離脱」によって表明される「自由」や「解放」は、起元の喪失、「根」の喪失として否定的に捉えられ、その「喪失」への危機感や被害感が、回顧的に「失われたもの」の理念化を引き起こす。そこから、人びとを新しい神話や編み出された「伝統」に繋ぎとめようとする、反近代主義のさまざまな傾向を生み出すことになる。だがどんな幻想を作り出そうとも、「産業化」そのものを拒むのではないかぎり、人間が所与の土地との結びつきから離れ、狭い生活圏の束縛から離陸してゆくのを止めることはできないのだ。

(出典 西谷修『離脱と移動』一九九七年)

設問一 傍線 a に書かれているような近代的な「自由」とはどのようなものであったか、わかりやすく説明せよ。(一五〇〜三〇〇字)

設問二 傍線 b に書かれているような「理念化」を、具体的な事例を挙げて説明せよ。(一五〇〜三〇〇字)

設問三 一九世紀以降の世界情勢がもたらした「移動」の積み重ねをへて成立した今日の二一世紀世界において、「共生」という理念がしばしば掲げられる背景にあるものがなんであるか、みずからの研究テーマに絡めながら考察せよ。(分量自由)